

遇

～ ぐ う ～

encounter magazine "Guu"



金相寺本堂・修正会

3月

March 2012

No. 2

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



●比叡山での修行

親鸞聖人は比叡山で堂僧として、ひたすら仏のさとりを求め、修行に専念されました。しかし、懸命に修行すればするほど、自らの煩惱の身をいよいよ思い知らされることになり、生死の迷いを離れる道は開かれませんが、それどころか一層苦悩は深まるばかりでした。

●磯長の夢告

そんな中、建久二年（一一九一）、親鸞十九歳の時、大阪の磯長しながというところにあつた聖徳太子廟に三日参籠したことが伝えられています。親鸞が聖徳太子を崇敬していたことはよく知られていますが、この時も、自らの苦悩の解決を求め、三晩祈り念じ続けたのでした。そして二日目の夜、聖徳太子が夢の中に現れて、次のような言葉を告げられたと言われます。

「諦あきらかに聴け、諦あきらかに聴け、我が教令を。」

汝が命根は、まさに十余歳なるべし。命終わりて速やかに清浄土に入らん。善よく信ぜよ、善よく信ぜよ、真の菩薩を。」

（耳をすまして私の教えをよく聴きなさい。あなたに残されたいのちはあと十余年しかないでしょう。その命が終わる時、あなたはすみやかに清らかな場所へはいってゆくでしょう。ですから、あなたは今こそほんとうの菩薩を心から信じなければなりません）

この夢告は親鸞聖人にとってどのような意味を持つものなのでしょう。今後の聖人のご人生にとって、とても大きな意味を持つものとなります。続きは次号にてお伝え致します。





【顛倒】

愚生は幼い頃、母に連れられてよく群馬県の桐生へ行っていた。母の生家は井上と云い、桐生にあったからである。愚生が小学校へ入学する前で、五歳の頃であったと記憶しているが、母の生家の近くに桐生川という、群馬県と栃木県の境を流れる川があった。現在は暗渠あんきょになっていると聞いたことがあるので、それ程大きな川ではなかったのである。五歳の時の記憶としてはかなり大きな川として思い出されてくる。

その川を見に、五歳の私が一人で散歩に行った時のことであるが、川沿いをしばらく行くと橋があり、その橋の欄干から下を覗くと流水は清く澄んで、魚が群れをなして泳いでいるのが見えた。群れる魚の泳ぐ相の美しさに、暫く見とれていたが、ふと我に返った私は早く家に戻らなければと思ひ、もと来た道を急いだのである。しかし、歩けど歩けど母の生家に近づく気配がない。私は焦りを感じ、泣きながら駆けだしていった。

その時、自転車で通りかかった男の人が、泣きながら駆けてくる私を呼び止めて「井上さんとこの子じゃないか。どうしたんだ」と、自転車から降りて私の肩を抱いてくれたのである。私は知らない人であったが、その男の人は私を井上の家にいる子だと知っていてくれたのである。私とその男の人に「家がわかぬら」と泣きじやくりながら訴えると、「何だ坊や、井上さんの家は反対方向だぞ。道を間違えちゃったんだね。此方へ行ったらどんどん遠くに離れちゃうところだったね」と云って、自転車を乗せて送り届けてくれたのである。

この出来事は、五歳の私にとって初めての不安、焦り、恐ろしさの体験だったのであろう。六十年を経た今でもしつかりと記憶に留めている。まさに顛倒てんどうである。私は母の生家である井上の家に戻りたいと願いつつ、歩みは反対の方向に向かっていたのだから。六十七年にわたる愚生の人生を顧みるに、顛倒の人生であったと慚愧に堪えない。

人の世に 人と生まれて人となる
人の世てらす 人となれ人

これは愚生の先考せんこう(亡くなった父)が、私が二十歳の時に東京の実家の寺で催された成人式の折、参列した三十名ほどの新成人たんざくに、短尺たんさくに書いて贈ってくれたものである。人の世に人と成る道を歩めと願われながらも、その願いに逆らう人生を送り、人と成るべき道を逆走してきた我が身である。五歳の時の体験のごとく、目標に向かつて逆走しながらも、そ

れに不安や焦り、恐怖を懐くことがあつたら、少しは修正出来たのではと、涙する日々である。

我々は何人も、自身の幸せを願いつつ生きているに違いない。その幸せは、自身の欲望を成就することが幸せの道だと思ひ誤っていないだろうか。「渴して塩水を飲むが如し」という格言もある。欲望を追い求める道は、貪欲とんよくの煩惱が募るばかりで、いよいよ我が身心を煩ひ、悩ませるばかりである。古歌に「欲深き人の心と降る雪は、つもるにつれて道を忘る」とある。欲望を募らせると、人としての道を踏み外して暴走しかねない。

現代はグルメの時代などといって、美味を追い求めるが、滋養が身に付くかわりにいよいよ美味を追い求めるといった貪欲ばかりが募る様に見えるてならない。自分に与えられた食事がいかに粗末なものであつても、有難くいただく。その心を忘れてはならないと思う。幸せを願ひ、自身

の欲望を追い求める。顛倒にあらずや。

庶民感覚として、驚くほどの財を得て、狭い日本の中に何百坪の邸宅に住居し、自慢気な人を見ないでもないが、『法句経ほつくきやう』の中に「恥ずべからざるに恥じ、恥ずべきに恥じず。邪見に著せる衆生は、悪趣に趣く」とある。顛倒してはならない。人として貧乏は決して恥ずべきことではない。むしろ奢侈しやしこそ恥ずべきである。

人間社会の現実には、地位や名誉、財等を得んと争ひ、人を蹴落としてまで追い求めんとする修羅場の様相を呈するごとくであるが、『無量寿経ぶきやう』の中に「世人薄俗はくぞくして、共に不急ふきゆうの事を争う」とある。地位・名誉・財等を得ることが、我が身の幸せを得ることだと顛倒し、一大事の如く互いに争ひ唾いがみ合う相を悲しまれての、み教えといただける。

我々現代人は人間として顛倒した道を暴走していることに気付かなければならない。物質的豊かさ、経済的豊かさが人間の幸せとする幻想から覚め、人間としての真の救い、真の喜び、真の幸せの道を仏のみ教えに求めねばならない時ではないか。道に迷った時、五歳の私は泣きながら走るしかなかったのであるが、人間としての真の救い、喜び、幸せを御体解せられた先聖のみ教えがある。浄土真宗にご縁をいただく私共としては、祖師親鸞聖人のみ教えを、全身を耳にして聴聞し、一大事の問題に覚めていく以外に、顛倒から救われる道はないと思うのだが。

成田 宣信 (金相寺住職)



おんどうぼう 御同朋の声

【 正信偈を学ぶ会のご案内 】

三浦 省一氏（金相寺門徒総代）

金相寺副住職さんから『正信偈（正信念仏偈）』を学び理解する会を企画したい。これ通じ門徒（檀家）の皆様との交流を一層深める場ともしたいとの趣旨のご提案が役員にありました。

浄土真宗では法要をはじめ『正信偈』は日常的に読誦される中心的經典だと思います。お彼岸、お盆、報恩講など皆様がお集まりになる金相寺での法要でも必ず毎回読誦されます。しかしながら、我々在家のものにとつては原文では、その内容、趣旨の理解は決して平易とは言えないものと思います。『正信偈』について学び少しでも理解出来る機会、加えて皆様との交流を深める機会をもつこと

は大変意義のあることと役員一同判断致しました。

相談の結果、次の様な形で行ったかどうかということになりました。来る3月のお彼岸の法要での集まりの際に副住職さんから改めて説明があると思いますが、皆様からのご意見・ご提案、ご参加を心からお願ひ致します。

一・目的：『正信偈』を学ぶこと及び談話を通じ門徒（檀家）の方々の交流を深めること。

二・開催日程：隔月で法要行事の月と重ならない偶数月の第一土曜日、午後二時から二時間程度。

三・内容：前半は『正信偈』について解り易く解説されているテキストを用いその意味するところを学ぶ。後半は皆様との自由形式的な談話会にする

四・会費：無料
五・誰でも気軽に参加出来る会にする。

個人的にはお経の内容を理解出来ればお寺に来る楽しみも増えるので

はないかと思つています。まずは『正信偈』から始めてみませんか。会合の後半は色々な話し合いができる時間とする予定ですので、これもまた楽しい場となると思つています。



【 寺報に寄せて 】

藤澤 清氏（金相寺門徒総代）

東日本大震災から早くも一年が経ちました。当時のショックはかなり薄れつつありますが、改めて震災に関して見つめ直す必要があるのかと思ひ、私自身の新潟地震体験を少し述べさせていただきます。

新潟地震は、東京オリンピック開催直前の昭和三十九年六月十六日の十三時頃でした。私は高校一年生で、昼休みの時間、突然激しい縦揺れが始まり、続いて大きな横揺れがドスンといった感じで襲ってきました。

地震規模はマグニチュード七・五と関東大震災級でした。震源地は佐渡と粟島間の活断層で、粟島が数メートル浮き上がったと聞いています。大きな揺れがあった時は、野球練習場二枚分もある広いグラウンドは、大きく波打ち、校舎の方に逃げ帰ってくる人たちは転げながら走り、鉄筋コンクリートの校舎は大きな船のようにゆっくり揺れていました。

東日本大震災では、千葉県の浦安辺りは地盤の液化化による被害が大きく報道されていましたが、新潟地震での被害の大半はこの液化化によるものでした。アパートビルの横倒し、大きな橋の落下、鉄道軌道敷の陥没、事務所ビルの一・五階程陥没したことなど、新聞などで写真付きで大きく報道されておりましたのでご記憶の方もおられると思います。信濃川河口付近の海拔0メートル地帯は、更に地盤が沈下し、地震後も数か月水没する地区もありました。地震発生当時、私は古い木造校舎の中にいましたが、何故かは分かり

ませんが特段校舎倒壊の心配はせず、冷静に周囲の状況を観察することができました。教室が連なる建築構造が、古くても意外に強いものだと感じられたのかも知れません。

揺れがピークアウトしかけたころ、突如校舎の基礎コンクリート下から、まるで高圧水道管から水が噴き出すように（勿論そんなものはありません）多量の地下水が吹き出し、見る見る校舎が大きく波打ちながら陥没していく一方、グラウンドではあちこちから大きな水柱が（最大で人の背丈ほど）吹き上がっていました。

新潟は、信濃川と阿賀野川、両大河の沖積平野で、その多くは河口地の泥炭地を埋め立てた場所にありますので、揺れによる建物倒壊被害は殆どなかったのに対し、上記のような液化化による被害が大きかったことが強い印象として残っています。最近、学校などの公共物は耐震強化工事が盛んに行われるようになっていますが、その地盤に注目はあまりされていらないように思います。地

盤の被害は、建物そのものに被害がなくても傾いたり沈んだりしたらその建物は使い物にならなくなります。また、地盤修復工事は範囲が広すぎて個人規模ではどうにも手が付けられません。

土地には、過去の記憶があります。現在お住みの場所は昔どんな土地であったのか、できる限り古地図を調べるなり、土地造成業者に聞くなりして調べることをお勧めします。昔の沼地、河川敷、田んぼなどの湿地を埋め立てた場所だったら液化化の被害にあらう可能性は高いと思われる。

過去の歴史では、東北に大地震があると程なく関東地方、東海地方、南海地方と順次大地震が相次ぐといわれています。いづれ来るであろう大地震に対して“想定外”の事態にならぬよう祈る次第です。



副住職の

日々の出遇い



● 子ども会・青年会合同開催 報恩講のご報告

昨年十一月十二日(土)、当寺報恩講の前日、子ども会と青年会合同で親鸞聖人のご命日の集い・報恩講をお勤め致しました。

まずは、本堂にて親鸞聖人が書き残された『正信偈』のお勤めをし、その後、親鸞聖人とはどのような方なのか？親鸞聖人が大事にされた南無阿弥陀仏とは一体何なのか？私たちにとって最も大切なこと、尊いこととは何なのか？など、大切なお話をみんなで聞きました。また、お話後はみんなで手遊びなどゲームを楽しみました。

お話し・ゲームをしていただきましたのは、東京都港区の徳玄寺副住職・坪内秀樹先生です。坪内先生は私(副住職)が日頃より公私共に大変お世話になり、子ども会と青年会を開催させていただききっかけをい

ただいた先生です。先生には遠路足をお運びいただき誠にありがとうございました。



坪内秀樹先生

体を動かし、お腹も空いてきたところで、境内にて炭火でお餅を焼いて、けんちん汁と一緒に食べました。何てことのない食事も、みんなで外で食べると特別おいしく感じますよね♪

多くの方にご参加いただき、とても貴重で楽しい時間を過ごすことができました。また4月1日に花まつりを開催致します。皆さんにまたお会いできることを楽しみにしています。ご参加お待ちしております。

今後の予定

法要

三月二十日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十二日 秋彼岸会
十一月十一日 報恩講

勉強会など

四月一日 午後二時～
子ども会 花まつり

※ 詳細はホームページをご覧ください

四月七日 午後二時～

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※ 以後、偶数月（六・八・十・十二月）の
第一土曜日に開催予定。

毎月一回 仏教青年会

※ 毎月の開催日等、詳細はホームページを
ご確認ください。どうか電話・メールにてお問
合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。
詳細は随時ホームページをご確認いた
だくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

去年から青年会や子ども会を開催させていただき、またそれらの活動をこの寺報やホームページでご案内及びご報告させていただく中で、様々な方々とのご縁をいただくことができました。

また、そのような流れの中で、今年から新たに輪読、座談を通して『正信偈』を学ぶための会が立ち上がることとなりました。（詳細は「御同朋の声」の三浦氏からのご寄稿をご参照下さい）

日頃より皆さんとは、法要やご法事を通してしか接する機会がありませんでした。またそれ故に、ご門徒（お檀家）さん同士の繋がりとこの持ちにくかったように思います。寺という場を通して、様々な出会いが成就することを願い、また自らの日頃の思いなどを安心して語り、集える場づくりを目指して、一層励んでいきたいと思っております。またこの寺報を通して皆さんからのご意見等々も反映していければと思っております。是非お気軽にお声かけ下さい。

合掌

『遇くぐうく』第二号
発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺
副住職 成田 宣明

TEL 252-0328

〒252-0328 神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL&FAX 042-778-2879

e-mail konsouji@arta.ocn.ne.jp.

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>

発行日 二〇一二年（仏暦二五五五年）年三月一日